

## 川端康成の『竹取物語』現代語訳

沼尻利通

### はじめに

川端康成は平安時代の物語文学の現代語訳をいくつか刊行している。その中に『竹取物語』がある。川端康成の『竹取物語』現代語訳の特徴は、山田吉郎によって明らかにされている。それによれば、川端康成は『竹取物語』を近代小説的にとらえる視点を持っており、近代小説に近い形式による自由で素直な訳と評価されている。

川端康成が、最初に『竹取物語』の現代語訳を発表したのは、一九三七年八月一日である。現代語訳国文学全集の第三巻として『竹取物語』の現代語訳と解説を、非凡閣より出版している。これを皮切りに、川端康成による『竹取物語』の現代語訳は河出書房、河出書房新社から形を変えて刊行されていく。川端康成の死後においても刊行は続く。一九八二年に刊行された『川端康成全集』第三五巻（新潮社）に収載、一九九八年には、講談社インターナショナルから、『対訳竹取物語』（二月二〇日発行）が発刊され

る。これは現代語訳が川端康成で、英訳をドナルド・キーン、挿絵の切絵を宮田雅之が担当した横本である。見開きの左のページに川端康成の現代語訳、右のページにドナルド・キーンによる英訳が載せられ、所々に切絵を配した趣向の本である。この本の数ヶ月後の一九九八年六月一日に、『川端康成全集』を底本とした『現代語訳竹取物語』が、新潮文庫より刊行されている。

川端康成による『竹取物語』の現代語訳は、いくつかのバリエーションがあり、それぞれ微妙に異なっている。川端康成は、一九三七年に『竹取物語』の現代語訳を発刊した後も、その現代語訳に手を加え続け、改変していたことになる。本稿では、川端康成の生前に発刊された『竹取物語』現代語訳を整理し、それぞれの関係をふまえた上で、その差異について考察していきたい。

## 一、川端康成『竹取物語』現代語訳の種類

川端康成の『竹取物語』現代語訳の出版は、一九八二年に新潮社から刊行された『川端康成全集』第三五巻の解題に、次のように述べられている。

「現代語訳國文學全集」第三巻に「竹取物語他三篇」として昭和十二年八月十五日、非凡閣より刊行された。同書の巻頭には、それぞれ三篇の作品に對する解説が収められてゐる。本全集では、これを第三十二巻に収録した。なほ、昭和十八年八月三十日に、非凡閣より假綴本として「現代語訳竹取物語」と題し、「堤中納言物語」と二篇を収め、刊行されたことがある。「とりかへばや物語」は、昭和十二年當時でさへ、伏字を餘儀なくされてゐた。それが昭和十八年ともなると、世情の極端な右傾化が促進され、ために皇室の尊嚴ををかすおそれありとされて、この一篇を削除したと思はれる。また「竹取物語」はのちに「日本國民文學全集」第五巻「王朝物語集Ⅰ」（昭和三十一年六月二十五日、河出書房刊）、「日本文學全集」第三巻「竹取物語・伊勢物語・落窪物語・夜半の寢覺」（昭和三十五年九月十五日、河出書房新社刊）などにも収められたことがある。

この現代語訳については、最近、川端家から發見さ

れた資料によつて検討してみると、石濱金作氏などが、一部に協力したのではないかと推測される趣があることを、附け加へておく。

（傍線は引用者・四五三―四五四頁）  
解題では、四冊の本が紹介されている。一九三七年（昭和十二年）に非凡閣より刊行されたもの（A1）、また同じ非凡閣から假綴本として一九四三年（昭和十八年）に刊行されたもの（A2）。さらに河出書房から、一九五六年（昭和三十一年）に日本國民文學全集第五巻「王朝物語集（一）」として出版されたもの（B1）、一九六〇年（昭和三十五年）に河出書房新社から日本文學全集第三巻「竹取物語・伊勢物語・落窪物語・夜半の寢覺」（C）として刊行されたものである。以上の四冊が、『川端康成全集』の解題に示されたものだ。

この解題に示された四冊以外にも、いくつかの川端康成の『竹取物語』現代語訳が確認できる。河出書房は昭和三年（一九五六年）に日本國民文學全集第五巻「王朝物語集（一）」（B1）を出版した。ところが河出書房は一九五七年に経営破綻。河出書房新社として再建される。その河出書房新社は、一九五八年一〇月一五日に日本國民文學全集第五巻「王朝物語集（一）」（B2）を出版しなおしている。この後、河出書房新社は一九七一年七月一五日に、日本の古典第五巻として「王朝物語集Ⅰ」（D）を

出版し、そこに川端康成『竹取物語』現代語訳が収載されている。一九七二年四月一六日に川端康成が死去した後、一九八二年二月二〇日に新潮社より『川端康成全集』第三五巻が発刊され、そこに『竹取物語』現代語訳（E）とその解題が収められた。その後も、川端康成の『竹取物語』現代語訳は出版され続け、前述したとおり、一九九八年三月二〇日、講談社インターナショナルより英訳と対照させた『対訳竹取物語』（F）が出版、同年六月一日に新潮文庫（G）からも出版されている。これら、出版の状況をまとめると、次のような年表になる（図1参照）。

以上、川端康成の生前に刊行されたものは六冊。死後に刊行されたものは三冊。合計すると九種類のものが刊行されている。

このうち、出版日時は異なるものの、本文がまったく同じものが二つある。一つは、非凡閣によって出版されたものの（A1）と（A2）、いま一つは河出書房（河出書房新社）の日本国民文学全集第五巻『王朝物語集（一）』（B1）と（B2）である。

前者の非凡閣の本を検討していきたい。非凡閣からは二種類の『竹取物語』現代語訳が出版されている。一九三七年、非凡閣の現代語訳國文學全集第三巻『竹取物語（他二篇）』（A1）と、それに続いて出版された、一九四三年、非凡閣の『現代語訳竹取物語』（A2）である。一九三七

【図1】川端康成『竹取物語』現代語訳の諸本の成立年表

- 一八九九年（明治三二年）六月一日 川端康成生まれる
- 一九三七年（昭和十二年）八月一日 『竹取物語（他二篇）』現代語訳國文學全集第三巻 非凡閣（A1）
- 一九四三年（昭和十八年）八月三〇日 『現代語訳竹取物語』非凡閣（A2）
- 一九五六年（昭和三十一年）六月二五日 『王朝物語集（一）』日本国民文学全集第五巻 河出書房（B1）
- 一九五七年（昭和三十三年） 河出書房経営破綻 河出書房新社設立
- 一九五八年（昭和三十三年）一〇月一日 『王朝物語集（二）』日本国民文学全集第五巻 河出書房新社（B2）
- 一九六〇年（昭和三十五年）九月一日 『竹取物語・伊勢物語・落窪物語・夜半の寝覚』日本文学全集第三巻 河出書房新社（C）
- 一九七一年（昭和四十六年）七月一日 『王朝物語集I』日本の古典第五巻 河出書房新社（D）
- 一九七二年（昭和四十七年）四月一六日 川端康成死去
- 一九八二年（昭和五十七年）二月二〇日 『川端康成全集』第三五巻 新潮社（E）
- 一九九八年（平成一〇年）三月二〇日 『対訳竹取物語』（英訳・ドナルド・キーン）講談社インターナショナル（F）
- 一九九八年（平成一〇年）六月一日 『現代語訳竹取物語』新潮文庫（G）

年に出版されたものは、上製本、いわゆるハードカバーのもの、一九四三年に出版された「新装版」は、並製本、いわゆるペーパーバックである。後者の、一九四三年『現代語訳竹取物語』奥付には、「昭和十二年八月十日 印刷／昭和十二年八月十五日 発行／昭和十八年八月三十日 新装發行（五・〇〇部）」とある。「新装發行」と新しく活字を組み直したかのように見えるのだが、実のところは同じ製版によって版行されたものである。新装版にするにあたり、本文に手を加えてはいない。したがって、二つの本の本文を見比べると、二つはまったく同じ組版となっており、同一の製版によって印刷されたことがわかる。本文を詳しく検証しても、同じ結論に至る。最初に出版された一九三七年版「A1」での特徴的な誤植を、一九四三年新装版「A2」でも受け継いでいるのである。いくつか具体例を示していきたい。非凡閣の一九三七年版「A1」では「その神の援助によつて玉の杖を作り始められたのである」（二八頁・傍点引用者、以下同じ）となっている。ここは蓬萊の玉の杖を車持皇子が偽造するくだり、「玉の杖」であるべき箇所が「玉の杖」と誤植が確認できる。この誤植は、一九四三年新装版「A2」の同頁でも、「玉の杖」となっており、誤植が訂正されることはない。この誤植の訂正は、一九五六年の河出書房から出版された日本国民文学全集第五巻『王朝物語集（一）』（B1）を待たなければな

らない。このように非凡閣の一九三七年版「A1」に特徴的な誤植はいくつか確認できる。傍点で誤植の箇所を示しつつ実例をあげると、「力を盡しましたと、些少にはござりませぬ」（二六頁）、「それでこれを技り取つてきたのです」（三四頁）、「もう二度とここへ歸つてくるのではない」と仰つたので」（四一頁）、「お氣付にまると」（五七頁）、「わたしは帝の御役にも立ちませう」（六六頁）、「そにはどうしてもゆかぬといふわけには参りませんので」（七三頁）、「このわしと並んでも勝り劣りがない位」（七四頁）、「大聲で位きわめくのであつた」（七四頁）、「考へてみま」と」（八〇頁）などのような、明らかな誤植が、訂正されないまま一九四三年新装版「A2」にも受け継がれている。これら特徴的な誤植は一九三七年版「A1」と一九四三年新装版「A2」に共通で、これ以後に出版されたものには継承されることがない。一九三七年版「A1」と一九四三年新装版「A2」の本文が同一のものであることを物語っている。非凡閣の『竹取物語』現代語訳は、外見こそハードカバーとペーパーバックの違いはあるが、中身は全く同じものである。

河出書房と河出書房新社から出版された、日本国民文学全集第五巻『王朝物語集（一）』（B1）と（B2）も事情は同じである。河出書房から出版された奥付は「昭和三十一年六月二十日初版印刷 昭和三十一年六月二十五日初

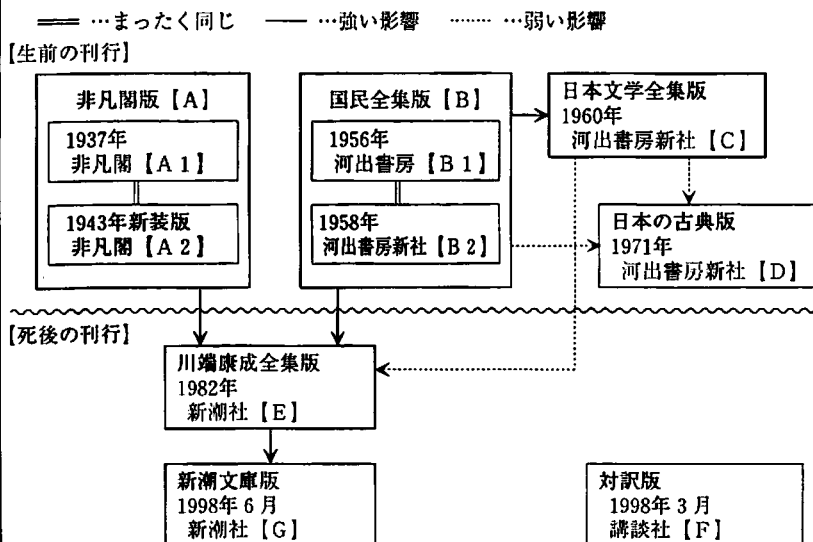
版発行」とある。その二年後、河出書房新社から出版された奥付には「昭和三十三年十月十日初版印刷／昭和三十三年十月十五日初版発行」とある。発行日が異なるため、それぞれ違うものではないかと思ってしまうが、二つを見比べてみると、ともに三段組で、まったく同じ組版である。同一の製版によって印刷されたものである。したがって、河出書房と河出書房新社から出版された日本国文学全集第五巻『王朝物語集（二）』での川端康成の『竹取物語』現代語訳は、出版年月日のずれはあるものの、中身は全く同じものと判断できる。

以上を踏まえた上で、これら本文の系統図を描くと次の「図2」ようになる。川端康成の生前、川端康成が手を加え得たものは、非凡閣版【A】の二種（一九三七年と一九四三年）と、国民全集版【B】の二種（一九五六年と一九五八年）、および一九六〇年に河出書房新社より出版された日本文学全集版【C】と一九七一年にやはり河出書房新社から出版された日本の古典版【D】の、合計四種（細分化された非凡閣版と国民全集版を加えれば六種）となる。

## 二、非凡閣版から国民全集版、日本文学全集版へ

戦前に川端康成は『竹取物語』の現代語訳を非凡閣から出版し、戦後、河出書房（河出書房新社）から現代語訳を

〔図2〕川端康成『竹取物語』現代語訳の系統図



出版し続ける。非凡閣版は一九三七年、新装版を一九四三年に出版し、河出書房（のちに河出書房新社）からは、日本国文学全集として一九五六年と一九五八年、日本文学全集として一九六〇年、日本の古典として一九七一年、それぞれ出版しているのがあった。古典文学作品の現代語訳を出版する企画が川端康成のもとに持ち込まれ、過去に川端康成が『竹取物語』の現代語訳を出していたため、出版するという運びになったのであろう。このような流れであるなら、非凡閣版の本文がそのまま河出書房（河出書房新社）の企画に流用されていくことになりそうである。ところが、詳しく検討していくと、それぞれの訳文には微妙な違いがある。新しく出版するさいに、川端康成は訳に手を加えているのである。微妙な修正を加えながら出版が続けられているのだ。もちろん、先に指摘した誤植などは訂正されることになるが、訳の本文自体を変えることもある。では、これらそれぞれの本文はどのように違うのだろうか。戦前に出版された非凡閣版「A」の特色は、歴史的仮名遣いが使われているというところにある。促音もすべて大文字、文字も旧字体が用いられている。具体的に示すと、昔、竹取の翁（おきな）といふ人があつた。野山に入つて竹を取つては、それで籠（かご）などを作り、生計にあててゐた。名を、讃岐造麻呂（さぬきのもろ）と云つた。或る日さうして竹を取つてゐると、その中に一本幹（かた）の光る竹があつた。不思議に

思ふて近寄（よ）つてみると、その筒（つつ）の中が光つてゐる。更によく見ると、その中に三寸ほどの小さな人が可愛らしく入つてゐた。そこで翁（おきな）は、

「わしが毎日朝夕に見る竹の中にゐたのだから、そなたは當然わしの子になるべき人ぢや。」と云つて、その子を手の中に入れて家へ歸つた。

（非凡閣版「A」二頁）  
となつてゐる。「人があつた」「生計にあててゐた」「當然」「歸つた」など、歴史的仮名遣いであり、「つ」などの促音も大文字、字体も旧字体であることがわかる。

また、もう一つの特徴は、和歌をどのように表記するかという点にある。句読点によつて和歌を区切つてゐるのである。これも例示すると、

かぐや姫は不思議に思ふて、それを見ると、鉢の中に手紙が入つてゐる。ひろげて見ると、

海山の、路に心を盡し果、御石の鉢の、涙流れき。

（その意味に、あなたの御註文の佛の御石の鉢をとり、天笠まで海山千里の道を心のありたけをつくして苦勞をしてとり行つたので、私は實際血の涙が流れたと。御石の鉢のちを血にかけて歌つたのである。）

（非凡閣版「A」一四～一五頁）  
となつてゐる。和歌は本文に対して三字下げ、読点によつ

て区切られ、末尾には句点がうたれている。その左に、和歌の訳がポイントを落として示される。『竹取物語』には一五首の和歌があるが、非凡閣版ではすべての和歌に句読点がうたれている。句読点は、五、七、五、七、七、七、というリズムで打たれているものがほとんどだが、例示した「海山の、路に心を盡し果、御石の鉢の、涙流れき。」の「路に心を盡し果、」のように七・五を説点で区切らない例も見られる。ほかに、「かぎりなき、おもひに焼けぬ 蓑、袂乾きて、今日こそは著め。」(三四頁)があり、「おもひに焼けぬ 蓑、」を説点では区切っていない。和歌の内容によつて区切りをつけているようである。この和歌への句読点は、非凡閣版に特有のもので、非凡閣版をベースにしたはずの川端康成全集版【E】には継承されていない。川端康成による非凡閣版での和歌への句読点は、和歌のリズムを重視し、自身の歌に句読点を付していた釈道空(折口信夫)の影響かもしれない。

以上のように、非凡閣版【A】は旧字体により、歴史的仮名遣いが用いられ、さらに和歌には句読点がうたれるという特徴がある。国民全集版【B】以後の日本文学全集版【C】、日本の古典版【D】ではすべてが新字体になり、現代仮名遣いに改められている。もちろん、和歌への句読点はうたれていない。非凡閣版の、旧字体と歴史的仮名遣いは、川端康成の死後に編纂された、川端康成全集版【E】

において復活する。ただし、川端康成全集版は、和歌の句読点は再現していない。

では、非凡閣版の旧字体と歴史的仮名遣いが、国民全集版以後には新字体と現代仮名遣いに改められ、本文の本身はまったく変わらないのか、というところ単純ではない。実は少しずつ微妙ではあるが、手加えられているのである。先に引用した、非凡閣版の冒頭部分と、次に示す国民全集版の冒頭部分を比較すれば明らかである。

昔、竹取の翁<sup>たけのおきな</sup>という人があつた。野山に入つて竹を取つては、それで籠<sup>かご</sup>などを作り、生計にあてていた。名は讃岐造麻呂<sup>さぬきのあやづり</sup>といつた。ある日、そうして竹を取つてみると、その中に一本、幹の光る竹があつた。不思議に思つて近寄つてみると、その筒の中が光っている。さらによく見ると、その中に三寸ほどの小さな人が可愛らしく入つていた。そこで翁は、

「わしが毎日朝夕に見る竹の中にいたのだから、そなたは当然わしの子になるべき人じゃ。」

と言つて、その子を手の中に入れて家へ帰つた。

(国民全集版【B】三頁)

二重傍線部を付したところが、非凡閣版と異なっているところである。句読点が新しくうちなおされていることがわかる。ほかに注目できる異同は「名を、讃岐造麻呂<sup>さぬきのあやづり</sup>と云つた」(非凡閣版)と「名は讃岐造麻呂<sup>さぬきのあやづり</sup>といつた」(国民全集

版・二重傍線部は引用者である。微妙な違いではあるが、助詞を訂正しているのである。このように、非凡閣版から国民全書版へと移行するにさいして、川端康成は細かな微調整をおこなっている。この微調整は、後の日本文学全集版〔C〕から日本の古典版〔D〕へと受け継がれていくケースが多い。具体的には、非凡閣版で「錢」(四一頁・四八頁)という言葉が二回出てくるが、国民全書版では「お金」(二二頁・一五頁)にすべて置き換えられ、以後の日本文学全集版、日本の古典版に受け継がれていく。これは非凡閣版での「支那」という言葉も同様である。「支那」という言葉は非凡閣版では五例確認できるが、それがすべて国民全書版では「中国」に改められ、以後の日本文学全集版、日本の古典版に受け継がれる。

細かい修正は、あげればきりがなくなるが、代表的な異同を、非凡閣版は点線、国民全書版は二重傍線で示していきたい。非凡閣版で「わしはその山の周囲の切岸を歩いてみました」(二四頁)が、国民全書版では「わしはその山の周囲のがけふちを歩いてみました」(八頁)と言葉が置き換えられている。このような例は多く、非凡閣版は「かくや姫は幼少の時から育て上げて、云はばまあ自分の生んだ子も同然であるが、しかし、あまりこちらが聞いても勿體ないやうなことを平然と云ふので、」(六一頁)が、国民全書版では「かくや姫は幼い時から育て上げて、いわ

ばまあ、自分の生んだ子と同じようなものであるが、しかし、あまりこちらが聞いても、もつたいないようなことを平気で言うので、」(一八頁)とのケース。ほかには、非凡閣版で「若しわたくしの申上げることが、この國の國王のお言葉に背いてゐるといふのでしたら、」(六二頁)が、国民全書版では「もしわたしの申し上げることが、帝のお言葉に背いているというのでしたら、」(二八頁)。非凡閣版で「それなのに、お前は泣いたり嘆いたりするわけは全然ないわけではないか。」(八三頁)が、国民全書版では「それだから、お前は泣いたり嘆いたりするわけは、全然ないではないか。」(二四頁)。非凡閣版で「この衣を着た人は、既に一切の物思ひがなくなつてしまふので、」(八八頁)が、国民全書版では「この衣を着た人は、着たが最後に一切の物思ひがなくなつてしまふので、」(二五頁)などの例があげられる。川端康成は、国民全書版を出版するさいに、非凡閣版に手を加え、細かく言葉を置き換えていることがわかる。これら置き換えられた言葉は、国民全書版以後の日本文学全集版、日本の古典版へ継承されるのである。

言葉を置き換えるのではなく、非凡閣版にあった言葉を、国民全書版にするさいに除去する例もある。非凡閣版には「さあ、何を置いてもいち早く神にお祈りをなさいませ。」(四五頁)とあるところが、国民全書版では「さあ、何を置いても、いち早うお祈りをなさいませ。」(一四頁)と



「神に」(点線)という言葉が削除されている。いまひとつ、非凡閣版で「いいえ、わたくしはたとへどのやうなことがございませうと、決して御宮仕へはいたしませぬ考へでございます。」(六四頁)が、国民全書版では「いいえ、わたしはどのようなことがございませうと、決してお宮仕えはいたしませぬ考へでございます。」(一八頁)と、「たとへ」(点線)が削除されている。これらの除去も、国民全書版以後に確認できる。このように言葉を除去する例は、いずれも微調整レベルのものだが、一文を削除することもある。非凡閣版での、火鼠の裘のくだりを示してみたい。

ついては、代金が少し不足だと役所の方から私の使の者に申越されましたので、私(王卿)から金を足して買ひ取つておきました。そこで今金子を五十兩だけ、早速お送り願ひたうございます。この船が歸ります時に、それだけのお金をどうかおとどけ願ひたう存じ上げます。若しまた、そのお代金が頂けません時には、どうかこの裘をそつくりそのままお返却願ひたう存じます。」(非凡閣版「A」三三三頁)

ここで示した点線箇所は、次に示す国民全書版では除去されている。

ついては、代金が少し不足だと役所のほうの方から私の使の者に申し越されましたので、私(王卿)から

金を足して買ひ取つておきました。そこで今、金子を五十兩だけ、さつそくお送り願ひとうございます。もしまた、そのお代金がいただけません時には、どうかこの裘をそつくりそのまま御返却願ひとう存じます。」

(国民全書版「B」一〇一―一二頁)  
国民全書版では「この船が歸ります時に、それだけのお金をどうかおとどけ願ひたう存じ上げます」が除去されているのである。

このような除去は、他にも確認できる。蓬萊の珠の枝のくだりで、非凡閣版は、

かぐや姫は、さつきの懇願した細工人達を呼び入れて、有難い人達だとばかりに、給金をうんと取らせた。すると細工人達は非常によろこんで、「ああ思つた通りに頂けた。」と、喜喜として歸りかかつたが、その途中で車持皇子のために彼等は血が出るほどにもひつぱたかれた。折角貰つたお給金も甲斐もなく、皆捨てさせられてしまつて、さてはほうほうの態で逃げ失せたのである。

(非凡閣版「A」二八―二九頁)  
となつてゐる。点線部分に注目しつつ、国民全書版と見較べてみると、

かぐや姫は、さつきのお願いにきた細工人たちを呼び入れて、有難い人たちだとばかりに、給金をたくさん取らせた。すると、細工人たちは非常によろこんで、

『ああ思った通りにいただけ。』と、喜々として帰りがかったが、その途中で、車持皇子のために彼らは血が出るほどにもひっぱたかれた。せつかく貰ったお給金も甲斐もなく、さては、ほうほうの態で逃げ失せたのである。

（国民全集版【B】一〇頁）

と、非凡閣版の「皆捨てさせられてしまつて、」が、国民全書版では除去されている。この箇所は少し手を加えたように、非凡閣版では「懇願した」（点線部）が「お願いにきた」（二重傍線部）に、「うんと」（点線部）が「たくさん」（二重傍線部）と置き換えられていた。そうした微調整のなかで、川端康成は「皆捨てさせられてしまつて、」を削除したことになる。

はたして、これらの除去は、『竹取物語』の原文と照らし合わせると、正しいことと言えるのだろうか。火鼠の裘のくだり「この船が歸ります時に、それだけのお金をどうかおとどけ願ひたう存じ上げます」や蓬萊の珠の枝での「皆捨てさせられてしまつて」は、それぞれ『竹取物語』の原文ではどのようなになっているのであろうか。『竹取物語』の本文を『竹取物語全評釈』（本文評釈篇）で確認すると、前者の火鼠の裘の箇所は「舟のかへらむにつけてたひおくれ」（二六一頁）となっており、後者の蓬萊の珠の枝の箇所は「みなとりすてさせ給てければ、にけうせにけり」（二三九頁）となっている。『竹取物語全評釈』が依拠

した本文は天理大学附属天理図書館が所蔵する、いわゆる武藤本である。武藤本以外のほかの本文の異同を確認してみても、どの本文もこの箇所は存在するのである。したがって、これらの箇所については、川端康成は自身の判断によって除去したのであって、原文を根拠として除去したのではない。非凡閣版の『竹取物語』は、割と原文に忠実な現代語訳であったが、国民全書版になると、川端康成は自身の判断によって『竹取物語』を修正しているのである。

こうした国民全集版で修正されたものは、そのまま一九六〇年に河出書房新社から出版された日本文学全集版【C】に受け継がれていくことになる。国民全集版【B】と日本文学全集版【C】の本文を比較していくと、ほぼ同じものと考えて良い。ただし、語句の修正などごくごく微細な異同が確認できる。具体的に示していきたい。国民全集版「一旦はそうして帰って行つたものの」（六頁）が、日本文学全集版では「いったんそうして帰って行つたものの」（七頁）と、日本文学全集版で「は」が除去されている。

このような助詞の削除はほかにも確認できる。国民全集版「御自宅のほうへもお歸りにもなりません」（七頁）が、日本文学全集版では「御自宅のほうへもお歸りになりませず」（二〇頁）に。国民全集版「このまま帰るといわけにはまいりませんが」（一八頁）が、日本文学全集版では「このまま帰るといわけにはまいりませんが」

（二七頁）と、それぞれ「も」や「の」という助詞を除去しているのである。ほかに言葉を置き換える例も確認できる。国民全集版に「『皇子さまには、われら賤しい細工人とともに』（九頁）と二重傍線部が、日本文学全集版では「皇子さまには、われわれ卑しい細工人とともに」（一三頁）と点線部のように「われら」が「われわれ」に置き換えられている。微細ながらも、細かに手を加えているのである。国民全集版は一九五六年に、日本文学全集版は一九六〇年に発刊された。四年しか開きがないため、このような細やかな修正にとどまったのであろう。

### 三、日本の古典版の独自性

川端康成は自身の『竹取物語』現代語訳が出版されるにさいしては、微妙な修正を続けていた。国民全集版〔B〕から日本文学全集版〔C〕へと移行するさいにも、微妙に修正を続けているわけだが、それでは一九七一年に出版された日本の古典版〔D〕ではそれらの修正をどのように受け継いでいるのであろうか。

注目すべきは、先に指摘した国民全集版から日本文学全集版への移行にさいしての助詞の修正は、それ以後に一九七一年出版された日本の古典版〔D〕には受け継がれていないのである。先に検討した日本文学全集版での「いった

んそうして帰って行ったものの」（七頁）をはじめとした、助詞を除去した例や国民全集版「われら」が日本文学全集版で「われわれ」に修正された例は、日本の古典版では国民全集版に戻っているのだ。したがって、川端康成は日本の古典版をなすにあたっては日本文学全集版ではなく、それより以前の国民全集版を主として依拠しつつ、修正作業をおこなっていたとも考えられる。ただし、日本の古典版は日本文学全集版からまったく影響を受けていないというわけではない。いくつかの特徴的な文字遣いが一致しているからだ。火鼠の裘のくだり、阿倍御主人の「かぎりなきおもひに焼けぬ裘」の和歌の解釈で、日本の古典版では「今日は楽しい気もちであなたとお会いすることができ」（三〇頁）と傍線部「お会い」となっている。日本文学全集版でも「お会い」（一六頁）である。ところが国民全集版では「お嬢い」（二二頁）である。非凡閣版も「お嬢い」（三五頁）であり、国民全集版はそれを受け継いでいることになる。ところが日本文学全集版で「お会い」とされてから、日本の古典版もそれに倣っており、日本の古典版は日本文学全集版の影響を受けていると考えざるを得ない。この「嬢い」と「会い」の差異は、例えば旧字体と新字体といったような文字遣いのレベルの異同ではなく、深い意味のあるものだ。「嬢う」は男女の交合をにおわせる言葉であり、結婚をも含意する言葉である。ところが「会い」

では、そうしたニュアンスは薄まってしまふ。英訳レベルで言えば「meet」と「marry」の違いである。

こうした、意味にかかわる異同はもうひとつ確認できる。

日本の古典版の、燕の子安員のくだりの末尾、「少し嬉しい言葉は、甲斐があつた」(三六頁)である。この箇所を「言葉」とするのは、日本の古典版以外では日本文学全集版(二六頁)だけに確認できる。非凡閣版や国民全集版ではどれも「こと」としている。このくだりは、燕の子安員をかぐや姫から求められた中納言・石上麻呂が、念願の燕の子安員を取つたと思つていたら、それは燕の糞であり、まさに「貝(甲斐)」なくして死んでしまふ。このことから、嬉しいことを「甲斐(貝)があつた」と言うようになった。との落ちである。ここで、川端康成は、日本文学全集版と日本の古典版では「少し嬉しい言葉」を「甲斐があつた」とし、それ以前に出版された非凡閣版や国民全集版では「少し嬉しいこと」を「甲斐があつた」と訳出しているのである。『竹取物語』の原文では、「すこしうれしき事をは、かひありとはいひける」(三九三頁)となつている。非凡閣版や国民全集版では、「少し嬉しいこと」と、あくまで「事柄」としてとらえており、原文に近いと言える。一方で、日本文学全集版や日本の古典版は「少し嬉しい言葉」とし、「こと」を「事柄」として漠然ととらえるのではなく、「言葉」と一歩踏み込んで具体的に訳出している

のである。原文の「事」の「事」を、「言葉」の「こと」としてとらえている。原文の字面通りの訳出ではなくして、その内実を具象化した解釈と言える。

以上のように、非凡閣版【A】から国民全集版【B】へと繋がつていたものが、日本文学全集版【C】で改変され、日本の古典版【D】に受け継がれていくという現象は、いくつか確認できるのだが、大きく意味にかかわるようなものは、先に示した二例のほかは、多くは微細なもので、編集上のレベルの問題と言える。具体的にいくつか示すと、日本の古典版で「かぐや姫のお婿さんになつて」(三〇頁)とあり、同じく日本文学全集版でも「お婿さん」(一七頁)である。ところが国民全集版では「お婢さん」(一二頁)で、非凡閣版も「お婢さん」(三八頁)である。ほかにも国民全集版「わたくしが天へ昇つてゆく」(二四頁)が日本文学全集版や日本の古典版で「上つてゆく」(日本文学全集版 三七頁・日本の古典版 四三頁)となつているところや、「分れ」(非凡閣版・国民全集版)が「分かれ」(日本文学全集版・日本の古典版)など送り仮名の差異などのレベルで確認できる。これらはほとんど編集上のレベルのことであるから、川端康成の感知するレベルの異同とは認めなくてもいいかもしれない。

ともかくも、日本の古典版は、国民全集版から直接影響を受けた部分と、日本文学全集版から影響のもの、二つの

系統の影響の上に成立していると考えて良い。では、この日本の古典版はどのような性格のものなのだろうか。結論から言えば、この日本の古典版はさらなる修正が多く含まれた、かなり独自性の強い位置にある。国民全集版や日本文学全集版にいくつかの加除修正がおこなわれていたが、さらにそうした加除修正を積み重ねたものである。具体的にみていきたい。

竹取翁がかぐや姫に五人の貴公子の誰か一人との結婚を提案するところ、非凡閣版は「あなたを思ふお志も深く、その上に、あのやうに仰有るものをあなたも早くお心をお決めになつて、あのうちのどなたかお一人にお契りになつては如何ですか」(九頁)である。現代仮名遣いに直した違いはあるものの、国民全集版や日本文学全集版も非凡閣版と同文である(国民全集版 四・五頁・日本文学全集版 六頁)。ところが、日本の古典版では「あなたを思ふお志も深く、そのうえに、あのようにおっしゃつてくださるのを、あなたもよく考えてみて、あのうちのどなたかお一人にお契りになつてはどうでしょうか」(二三頁)となっている。帝からの使者に会うことを拒む場面、非凡閣版では「いいえ、わたしはそんなに顔の美しい者ではございません。そのやうなお言葉では、どうしてわたくしは恥しくお會ひ致すことが出来ませう。」と云つて、どうしても云ふことをきかないのである」(六〇頁)であり、国民全集版、

日本文学全集版も同文(国民全集版 一七・一八頁・日本文学全集版 二六頁)。一方、日本の古典版では「いいえ、わたしはそんなに顔の美しい者ではございません。そのやうなお言葉では、わたしははずかしく、どうしてお会いたすことができません」と言つて、いうことをきかないのである」(一七・一八頁)となつてゐる。非凡閣版にある「どうして」「どうしても」(点線部)を除去し、かわりに「どうしてお会いたすことができません」と一つにまとめた形である。「どうして」「どうしても」と二つ続くとかどい印象を与えるため、一つにまとめたのである。またかぐや姫が天へ昇つた後での茫然とする竹取翁と姫を、非凡閣版は「あとに、翁と姫とはこのつて、悲しみ嘆き血の涙を流して惑ふたけれども、はやどうしようもなかつた」(八八頁)とあるところ、日本の古典版は「あとに、のこつた翁と姫の悲しみ嘆きは血の涙を流すほどであつたけれども、はやどうしようもなかつた」(四四頁)と文章が変えられている。こうした変更は全編において細かく行われている。

また、非凡閣版から国民全集版、日本文学全集版となるさいに除去された箇所も、日本の古典版では見直されている。先に指摘した箇所と重複するが、具体例を示す。蓬萊の珠の枝のくだりで、非凡閣版の「折角貰つたお給金も甲斐もなく、皆捨てさせられてしまつて、さてはほうほうの

態で逃げ失せたのである」(二九頁)の点線部分は、国民全集版や日本文学全集版では除去されている。ところが、日本の古典版では「せつかくもらったお給金も皇子が取りすてしまわれたので、ほうほうのていで逃げうせた。」(二八頁)となっている。火鼠の裘のくだりでは、非凡閣版で「早速お送り願ひたうございます。この船が歸ります時に、それだけのお金をどうかおとどけ願ひたう存じ上げます。若しまた、」(三三頁)の点線部分は、国民全集版、日本文学全集版では除去されていたが、日本の古典版では「さつそくお送り願ひたうございます。せめて船が中国へ歸りますまでにおとどけください。もしまた、」(二九頁)となっている。国民全集版や日本文学全集版で除去されていた箇所が、ふたたび訳出されなおされている。この二箇所は、共に原文に該当する本文があることから、非凡閣版や日本の古典版の方が、原文に即した訳出であるといえる。川端康成は、非凡閣版ではストイックに原文に即して訳出していたが、国民全集版、日本文学全集版では、自身の判断で訳文を除去し、原文から離れる結果となった。ところが、日本の古典版ではふたたび原文通りに訳出している。いわば原文回帰を遂げているのである。

こうした変更のほかに、日本の古典版特有の大幅な変更が二箇所確認できる。一つ目は、車持皇子が蓬萊の珠の枝を偽造する場面、

なかなか容易なことでは人々の近よれそうもない家をお造りになり、四方八方をふさいで、中にその六人の工匠たちをお入れになった。御自身もまた、その中にはいつて、玉の枝をお作りになった。それは、姫が注文したのと寸分たがわぬものにできた。

(日本の古典版「D」二五頁)  
である。該当場面の、非凡閣版を見ると次のようになって

なかなか容易なことでは人人の近寄れさうもない家をお作りになり、その家の園を嚴重にして、中にその六人の工匠達をお入れになった。御自身も亦、その中に入られたのである。さうしてその上にまだ御自身が御知行になつてゐる土地、十六ヶ所の莊園を神に御寄進なされ、その神の援助によつて玉の枝を作り始められたのである。それは姫が注文したのと、寸分違はぬものに出た。

(非凡閣版「A」一八頁)  
なお、先に触れたが、非凡閣版には「その神の援助によつて玉の枝を作り始められた」と誤植があり、国民全集版、日本文学全集版では訂正されている。ほか仮名遣いやルビの細かな異同はあるが、国民全集版、日本文学全集版は、非凡閣版とほぼ同文(国民全集版 七頁・日本文学全集版 九頁)である。この部分は、日本の古典版となるにさいして、大きく手が加えられてある。「その家の園を嚴重に

して」(点線部)が「四方八方をふさいで」(波線部)。さらに「入られたのである。」から「作り始められたのである」(点線部)までが大きく削られ、「はいつて、玉の枝をお作りになった」とのシンプルな文章に改変されている。二つ目の改変箇所。車持皇子が蓬萊の珠の枝をかくや姫に呈する場面である。

見ると、この玉の枝には次のような歌がついている。

いたづらに身はなしつとも玉の枝を

手折らでさらに帰らざらまし

(たとい自分は、どのような苦勞をして身を投げ出そうとも、どうしてあの御注文の玉の枝を取らずには帰つてこようか。これ、このとおりかならず取つてまいる。ちようどそれと同じように、やはり自分は今あなたをもらわねば、なんと言つても帰らない)姫は歌など心にも入らずばんやりしているところへ、竹取の翁がはいつてきて言うのに、

(日本の古典版「D」二二六頁)

これに該当する非凡閣版は、

見ると、この玉の枝には次のやうな歌がついてゐる。

いたづらに、身はなしつとも、玉の枝を、手折

らでさらに、歸らざらまし。

(自分はたとへ、どのような苦勞をして身を投げ出さうとも、どうしてあの御注文の玉の枝を取らずには歸つてこようか。これ、この

通り必ず取つて参る。恰度それと同じやうに、やはり自分は今あなたを貰はねば、なんと云つても歸らない。)

玉の枝も玉の枝だが、この歌も亦この歌でなかなか氣持がしつくりしてゐると、姫はほんやりと物思ひに耽つてゐるところへ、竹取の翁は入つてきて云ふのに、

(非凡閣版「A」一九〜二〇頁)

である。かくや姫に献上した蓬萊の珠の枝に歌がつけられ、それを受け取るかくや姫の様子が、非凡閣版では「玉の枝も玉の枝だが、この歌も亦この歌でなかなか氣持がしつくりしてゐると、姫はほんやりと物思ひに耽つてゐる」と表現されている。ここが、日本の古典版では「姫は歌など心にも入らずばんやりしている」と変更されているのだ。非凡閣版では車持皇子からの和歌を「なかなか氣持がしつくりしてゐる」と批評しながらも、考え込むかくや姫の姿であつたが、日本の古典版では、そもそも車持皇子からの和歌をも受け止めることもできず、茫然とするかくや姫の姿に変えられている。非凡閣版ではかくや姫は和歌を受け入れているのだが、日本の古典版では和歌を受け入れていない。意味が正反対である。

このような変更はどのような理由によるのだろうか。これは、川端康成が『竹取物語』の原文と向き合い、研究を重ねた成果と考えるべきである。一つ目の車持皇子が蓬萊の珠の枝を偽造するくだりの『竹取物語』の解釈は、本文

の異同もふくめ、難解とされ、古来から説がわかれていた。非凡閣版での訳は、川端康成が非凡閣版の現代語訳を出版した時期（一九三七年）では最新の注釈書である高崎正秀『竹取物語新釈』（一九三一年発行）の「御知行なさつてゐるだけ全部、十六ヶ所の莊園を神様へ御寄進なされて、神の冥助によつて、玉の枝を作りなさつた」と一致することから、この解釈に拠つたものらしい。ところがその後別の解釈の可能性を知り、日本の古典版のような訳出になつたのではないか。いわば川端康成は非凡閣版の後も、『竹取物語』の研究を自分なりに続けていたのだ。

このことは、二つ目の車持皇子が蓬萊の珠の枝に和歌を付して進呈し、その和歌へのかぐや姫の対応の訳出にもあらわれている。このかぐや姫の対応も、『竹取物語』の解釈では古来から意見が分かれていたところなのである。

『竹取物語』の原文では、「これをあはれともみてをるに、竹とりのおきなはしりていはく」（一九一頁）である。非凡閣版は「玉の枝も玉の枝だが、この歌も亦この歌でなかなか氣持がしつくりしてゐると、姫はほんやりと物思ひに耽つてゐるところへ」と訳出し、日本の古典版は「姫は歌など心にも入らずほんやりしてゐるところへ」としている。非凡閣版では、原文の「これをあはれともみてをるに」の「これ」を和歌としてとらえ、それを「あはれ」（なかなか氣持がしつくりしてゐる）と「見て居る」（ほんやり

と物思ひに耽つてゐる）とする。車持皇子の和歌を「あはれ」と感得するかぐや姫との解釈である。ところが、そうした解釈とはまったく反対に解釈するものが日本の古典版である。これは、原文の「これをあはれともみてをるに」の「みてをる」の「て」を「で」（打消の接続助詞）に解釈することに立脚した訳なのである。非凡閣版は「あはれとも見て居る」（なかなか氣持がしつくりしてゐると、姫はほんやりと物思ひに耽つてゐる）という解釈だが、日本の古典版は「あはれとも見て居る」（歌など心にも入らずほんやりしてゐる）という正反對の解釈になるわけである。日本の古典版の採用した「見て居る」説は、一九五七年に岩波書店より出版された阪倉篤義校注の『竹取物語』（日本古典文学大系）や、一九六〇年、朝日新聞社から出版された南波浩校注の『竹取物語』（日本古典全書）などに採用されており、ちょうど川端康成が非凡閣版に手を加えた国民全集版や日本文学全集版を出版していた時期に重なる。これら注釈書の「見て居る」説を反映させて、日本の古典版での訳出がなされたと考えるべきである。日本の古典版を出版するにあたり、川端康成は、新しい説を採り入れた訳出をしているのである。



## おわりに

川端康成の生前に発刊された『竹取物語』現代語訳は、一九三七年の非凡閣版、一九五六年の国民全集版、一九六〇年の日本文学全集版、一九七一年の日本の古典版、この四種類がある。これらを比較していくと、それぞれが出版されるにさいし、川端康成は細やかに手を加えていることがわかる。非凡閣版の特徴は、歴史的仮名遣いにより、和歌に句読点がうたれているところにある。その後、発刊されたものはすべて現代仮名遣いに改められている。

非凡閣版は『竹取物語』の原文に比較的忠実ではあるが、国民全集版から日本文学全集版にかけて、川端康成は非凡閣版に書かれていた記述を削除し、原文から離れる結果になっている。ところが、その後の日本の古典版では、削除していた記述を訳し直し、さらにその当時の最新の注釈書の解釈を反映させた訳にも改めている。日本の古典版は、非凡閣版や国民全集版、日本文学全集版とは違い、かなり特異な位置であると言えそうである。

ともかくも、川端康成は『竹取物語』と向き合い、その現代語訳に細やかに手を加えていたことは間違いない。川端康成にとって『竹取物語』の現代語訳は、一回的で静的な営みではなく、反復される中で微妙に変化していくものであったと言える。そうしたテキストの微細な流動は、

川端康成の死後にも続いていく。本稿では川端康成の生前のものに限定して考察したが、死後に発刊された川端康成の『竹取物語』現代語訳、特に川端康成全集版の本文が、生前に出版された四種類とどのような関係にあるのか、別稿で考察していきたい。

## 注

1 「川端康成における『竹取物語』受容」〔茨城キリスト教大学紀要〕第一七号 一九八四年三月。

2 「力を盡しましたと、些少にはござりませぬ」(二六頁)は「こと」と、「それでこれを授け取つてきたのです」(三四頁)は「折」と、「もう二度とこへ歸つてくるのではない」と仰有つたので」(四一頁)は「ぞ」、「お氣付にまると」(五七頁)は「な」、「わたしは帝の御役にも立ちませう」(六六頁)は「くし」、「そにはどうしてもゆかぬといふわけには参りませんので」(七三頁)は「そこに」、「このわしと並んでも勝り劣りがない位」(七四頁)は「ルビのずれ」(本来ならば「勝」に「まさ」のルビが付されなければならない)、「大聲で位きわめくのであつた」(七四頁)は「泣」、「考へてみま」と」(八〇頁)は「みます」とがそれぞれ正しい。なお、これらの誤植は、後の国民全集版や日本文学全集版、日本の古典版ですべて訂正されている。

3 釈道空(折口信夫)の短歌の特徴は、句読点がうたれているところにある(岡野弘彦「句読点―釈道空」『短歌研究』第三六巻第八号(通巻第四八巻第八号)一九七九年八月。山田吉郎の一連の研究により、川端康成は少年期に短歌を熱心に創作していたこと

が明らかにされている（『初期川端康成の短歌活動—白日社との関係—』（『前田夕暮の世界』第三集 一九八五年十二月）、『川端康成少年期の短歌活動』（『日本文藝論集』（山梨英和短期大学）第一八号 一九八八年九月）、『川端康成の短歌創作—大正三年を中心に—』（『鶴見大学紀要』第一部国語・国文学編 第三七号 二〇〇〇年三月）、『川端康成少年期の短歌創作—我足あまり冷たかりせば—』（『群系』第一四号 二〇〇一年一〇月）など）が、作歌の上で、釈道空（折口信夫）の影響を受けたかどうかについては明らかではない。ただ、折口信夫と川端康成は何度か面会や対談をおこなっている。対談については、谷崎潤一郎と川端康成、折口信夫の三者によるものが、一九四九年、『細雪』をめぐって」と題しておこなわれている（『折口信夫対話—日本の詩歌—』（角川書店 一九七五年）に収載）。折口と川端の面会は、一九三八年ごろ（加藤守雄『異郷の生』『折口学と古代学』慶應義塾大学国文学研究会編 桜楓社 一九八九年）と一九四八年ごろ（白田甚五郎『折口信夫について—信夫と康成—』『国文学』第三〇巻第一号 一九八五年一月号）におこなわれた証言がある。また、一九三八年に、川端康成は『百日堂先生』という折口信夫をモデルにした小説を発表しており、川端康成は折口信夫を意識していたことは間違いない。また折口信夫も川端康成の書評を発表している（『山の音を聴きながら—川端康成氏の近業—』『折口信夫全集』第三二巻 中央公論社 一九九七年）。二人の文学的な性向が共通しているとの指摘もある（長谷川泉『川端康成と折口信夫』（『川端康成燦爛映』至文堂 一九九八年）、森安理文『川端康成と釈道空と—晩年の魔界について—』（『折口学と近代』第一〇号 一九八四年八月））。

なお、『竹取物語』の原文は、特に断りのないかぎり、上坂信男

『竹取物語全評釈』本文評釈篇 右文書院 一九九九年により、頁数を付す。

5 なお、『竹取物語』の諸本の比較は、『竹取物語本文集成』（鶴城出版 二〇〇八年）によった。火鼠の婆の箇所は一九七—一九八頁、蓬葉の珠の枝の箇所は一七四—一七五頁。

6 国民全集版「一旦はそうして帰って行ったものの」（六頁）が、日本文学全集版では「いったんそうして帰って行ったものの」（七頁）と、日本文学全集版で「は」が除去されている。このような助詞の削除はほかにも確認できる。国民全集版「御自宅のほうへもお帰りになりません」（七頁）が、日本文学全集版では「御自宅のほうへもお帰りになりません」（二〇頁）に。国民全集版「このまま帰るといふわけにはまいりませんが」（一八頁）が、日本文学全集版では「このまま帰るといふわけにはまいりませんですが」（二七頁）と、それぞれ「も」や「の」という助詞を除去しているのである。ほかに言葉を置き換える例も確認できる。国民全集版に「皇子さまには、われら賤しい細工人とともに」（九頁）と二重傍線部が、日本文学全集版では「皇子さまには、われわれ卑しい細工人とともに」（二三頁）と、「われら」を「われわれ」に置き換えている。

7 『大漢和辞典』（巻三 大修館書店 一九八六年修訂版第三刷 七四四—七四五頁）によれば、「嬖」には、「かさなる縁ぐみ 親戚同志の結婚。重縁。重婚。血族結婚」という意味があり、熟語の「嬖合」には「男と女がまじはる」、「嬖婚」には「婚姻する」という意味がある。

8 非凡閣版の該当箇所は五九頁、国民全集版は一七頁。

9 『古典評釈』高崎正秀著作集第八巻 桜楓社 一九七一年 一七四頁。

岩波の大系本では、本文を「これをあはれとも見でざるに」とし、頭注では「感心もしないでいると」(二二六頁)としている。朝日の全書本では、本文を「これをも、あはれとも見でざるに」で、頭注では「見でか見でか問題のある點であるが、島原本に見すとある所から判断するとでがよからう。ではすて。一向趣あるものとも思はないでゐるところへ」とし、さらに補注でも「見で」の方がよい旨を論じている(二五二頁)。

(ぬまじり としみち・本学准教授)